

会社経営に連二無二突き進んでいく過程で、感謝の心をなくしていった自身の生活習慣を気づかされた話です。

Aさんは、思いもよらず夫に先立たれてしまいました。三人の子供は結婚し家庭を持つていたため、子供たちの面倒を見る必要はありませんでした。しかし、自宅のローンが残っていたため、夫を亡くし悲しんでいるのも束の間、清掃業の会社を起業することになったのです。

どんなに小さな仕事でも全て引き受け、Aさんは昼夜もいとわずに働き続けました。半年後には、社員が雇えるほどになり、経営は安定していきました。数年後、長男が入社し、起業して十五年で事業を継承することもできました。そのような時に、Aさんの身体に異変が起きました。

右胸に違和感を感じ検査を行なった結果、乳がんと診断されたのです。がんの進行度を表わす5段階のステージで、4〜5の間のステージでした。生存の確率は0・5パーセントと告知されたAさんは、(なんで私が……)と気持ちが悪くなり、治療を開始しました。専門医からは、抗がん剤でがんを小さくしてから手術を提案されましたが、頑なにそれを断り、すぐの手術を決心したのです。

手術までの間、病床では、入会していた倫理法人会で学んだ純粹倫理について振り返っていました。その基本の書物である『万人幸福の葉』の「序」には、『苦しみを喜んで迎え、病気になるば「おめでとう」という時代が来た」という一文があります。それまでAさんは、(何がめでた



6月のテーマ | 感謝という妙薬

自分を支えてくれた 家族・社員への感謝

いのだろう……と理解できませんでした。ところが、病気がなって、『葉』の第七条「疾病信号」を読むと【実は体がバイキンにおかされたり、悪くなったりする今一つその奥の原因がある。それは心に不自然なひがみ、ゆがみが出来たことである】という文章に目が留まりました。今までの生活を振り返ってみると、(このがんは患うべくして患ったのではないか)と思えることばかりでした。

そして、会社の利益を追求するあまり、社員にきつくなり、(わが社を選んでくれてありがとう)という気持ちをなくしていたことに気づいたのです。Aさんは、社員に感謝の念を抱いた時、胸がスーッと軽くなるのを感じました。病気で落ち込んでいた気持ちが和らぎ、治療に対して前向きになることができたのです。

その後、手術は成功し、手術から四年以上経過した現在、再発もなく、何ら不自由のない生活を送ることができています。生存率0・5パーセントの体験をしたAさんは、毎朝起きるたびに(今日も生かされている)という感謝の念が沸き起こります。「今、自分がいるのは、支えてくれている家族、自社で働いてくれている社員のお陰です」と、常に感謝の心を持って生活しています。

「がんという大病を経験し、自分の心の不自然さに気づくことができました。これが、めでたいということなのですね」と、『葉』に書かれた意味を理解することができたAさん。(これからの人生は、家族や社員と共に、潤いのある人生にしていこう)と心新たに決めたのです。